

147 病棟

長い、そして長い、真白い通路——
医師と部長刑事につきそわれて、ヤスエがヒタヒタと歩く。

148 病室

鉄格子がはまっている。
背を向けて立っている男、その動作は異常である。手を振り、足を踏みならして、リズムを口ずさんでいる。

——振りかえった竜夫はヤスエたちに、哀願するような眼つきで叫ぶ。

竜夫「なッ、オレ、気遣いだよなッ、なッ、オレ、変なんだよオ、頭がなッ、キエーッて、痛かったりよオ、ガンガン鳴ったリ、なッ、オレ、気が狂っちゃったんだよオ、なッ、そうだろう？ そう云ってくれよ、なッ、イテッ、イテッ、ヨオ」

不意に狭い室内を踊り狂う。

「ラ、ラ、ララ、ラリーッ、ラッ」

部長刑事「ほんとに気遣いなんですかね」

医師「これまでの診断では、そうとも云えませんがね」

竜夫「(叫ぶ)おい、みんな見てくれよオ、オレ、アメリカ人なんだ、ホラこの面、よく

149 病棟

見てくれよオ、なッ、そうだろう、いいか、俺はアメリカの歌をうたってるとんだ、よく聞いてくれよなッ。ラ、ラ、ララ、ラリー、ラッ——
それは歌というより、悲鳴に近い感じのメロディである。

長い通路を三人が戻ってくる。

竜夫の歌う奇妙な声が遠く聞こえる。

ヤスエの動きが一瞬、その場にとまると、そのまま烈しく嘔吐する。

ヤスエ「——(叫ぶ)あの人、気遣いよッ、ほんとに気遣いだって云ってやってよオ、お願いだから！」

医師「——(微かに、顔を左右にふる)」

ヤスエ「——(嘔吐する)」

150 病室

海の見える窓に向って、歌う竜夫。
その孤独な存在——。

(終)